

第6回
小湊小・中学校の跡地活用を中心とした
地域の活性化を考える100人会議
(略称：100人会議)

会議結果

○開催日 平成30年11月25日(日)

○場 所 鳴川市役所

○参加者

参 加 者	出席者数
市民（無作為抽出した方とH29年度事業仕分けの市民判定人）	17人
大学生・高校生	1人
小湊地区の関係団体等	11人

○コーディネーター

氏 名	所 属 等
伊藤 伸	構想日本 総括ディレクター
石渡 秀朗	構想日本 特別研究員
石井 聡	神奈川県逗子市市民協働部次長・市民協働課長
山根 晃	足立区政策経営部子どもの貧困対策担当課長・総合事業調整担当課長

1 開会（市長）

この100人会議は、地域の活性化という視点から、天津小湊地区の小学校統合後の跡地活用の方策を、市民の皆様とともに検討していきたいと考え、開催したものである。

会議の進行役には、事業仕分けでも協力をいただいた「構想日本」から、コーディネーターを派遣していただいて「住民協議会」の手法を用いて、進めてきた。

また、専門的視点からの意見や視点の提供を行っていただくため、高野誠鮮氏をはじめとするナビゲーターの皆様にも加わっていただいた。

第1回会議では、構想日本の加藤代表から、キーワードは「手作り」である。小中学校の跡地をどうするか、住民同士の議論を通して、鴨川市のまちづくりが「手作り」で行われていくための場づくりをしたい。との話もあった。

会議では、必ずしも楽しい話題ばかりではなく、ときには、本当に結論がまとまるのか不安に思われたり、最初を感じられたワクワク感がなくなってきた、という感想も伺った。

しかし、この会議での議論を通して、まちづくりを“自分ごと”とお考えいただき、そして、これまで以上に市政に関心をお持ちいただけるようになったのではないかとと思われる。

今後は、実現を図っていく段階になるが、来年度には運営事業者の募集に取りかかりたいと考えている。その際には、改めて意見をいただく機会を設けていきたいと考えているので、皆様には引き続きご協力をお願いしたい。

なお、統合小学校「天津小湊小学校」については、地域の皆様のご理解とご協力をいただき、開校に向けた準備が順調に進んでいる。

小湊幼稚園、ひかり保育園についても、園児数の減少に伴い、保護者の皆様と議論を重ねた結果、本年度をもって休園とする予定であることを報告させていただく。

2 前回の振り返り（構想日本 伊藤総括ディレクター）

第5回記入シートのまとめについて説明。

3 検討会議の開催経過及び小湊地域の活性化案（活用の方向性）（事務局）

第1～3回の検討会議の開催経過及び報告書（案）について説明。

4 今後のスケジュール（鴨川市経営企画部長）

今後は、複数の民間事業者に対して、報告書で示された方向性で事業が成り立つかどうかのヒアリング調査を実施する予定である。

それを受け、来年度には、具体的な計画や図面を作成することとなるが、その際には地元の皆さんにも関わっていただく仕組みを考えたい。

また、計画策定のタイミングで、100人会議での皆さんの思いが消えてしまってはならないので、市としてもしっかりと留意をして進めていく所存である。

これと並行して、施設の運営事業者の選定も進めていきたいと考えている。なお、事業者の選定にあたっては、民間事業者1者のみということではなく、地元組織と共同で運営していくということも想定をしていきたい。

その上で、2020年度中には施設を改修し、日蓮上人誕生800年となる2021年2月の開設を目指していくこととしたい。

100人会議に参加された皆さんには、来年度、再度お集まりいただき、進捗状況の報告を行うほか、改めてご意見を伺いたいと考えている。

行政としても現在は財政課が担当しているが、スピード感を持って推進していくための組織を検討したい。

5 意見交換

【発言者1】

1点目。プールをどうするかについて教えてもらいたい。

2点目。運営費に税投入を抑えることは良いことだと思う。ただし、安価な材料や備品を使った改修では、稼げる施設にならない。改修をするからには、しっかりとしたものを造ってもらいたい。

3点目。コミュニティセンター小湊について、小湊出張所をこちらに統合することは良いと思う。しかしながら、集会場の利用は多くあると思うので、その機能は引き続き残してもらいたい。

【事務局】

1点目のプールについては、今の段階で、除却ありきで進めると決めているわけではない。民間事業者との話し合いの中で決めていく予定である。

2点目について、ユニバーサルデザインやバリアフリーといったことも掲げているが、施設を長く使用していくためには、ある程度の規模で手を入れていく必要があると認識している。従来、過疎債の活用という話もしているが、それらも念頭に、しっかりとしたものとしていきたい。

3点目、コミュニティセンター小湊については、さとうみ学校に配置する機能を踏まえ、廃止又は統合を検討するものである。したがって、出張所と集会場の両方の機能をさとうみ学校に入れるとなれば、重複する機能は不要であろうということで記載をさせていただいたが、現状でさとうみ学校にどの機能を入れるかは未定である。

【発言者2】

現状では、駐車場の規模が小さい。施設が稼働していく中では、従業員が車で通勤することも考えられるので、施設整備にあたっては、その点を留意していただきたい。

【事務局】

ご指摘の点は、十分に留意して進めていくこととしたい。

【発言者3】

ユニバーサルデザイン、バリアフリー化にあたっては、来てくれるお客さんや施設利用者だけを対象とするのではなく、例えば障害者などの働く人にとっても働きやすい環境としてもらいたい。

【事務局】

ソフト機能の充実にあたっては、地域の方の協力が不可欠である。これまで、福祉的な機能として、例えば高齢者の方や障害者の方にカフェを運営してもらうことも考えられるという話もさせていただいた。したがって、そういった方が心配なく働けるような環境を実現していきたい。

【発言者4】

これまで会議を重ねてきて、良い意見もたくさんあったと思うが、この事業は必ず実施されるものと考えて良いのか。

【市長】

事業は実施する。ただし、報告書の内容をどう落とし込んで、どのような形で実施していくかという点については、決まっていない。今後、事業者の方の意見等も聞きながら、またそれを皆さんにお示ししながら考えていきたい。

【発言者5】

過疎債について、どのくらいの規模で考えているのか。

【事務局】

自治体が建設事業等を行う際に、地方債としてお金を借りることができる。そのうちの1つが過疎対策事業債（過疎債）である。

地方債毎に借りられる割合は異なっているのだが、過疎債については、事業費に対して100%を借りられることとなっており、かつそのうちの70%が後に地方交付税で措置されるとい、市の財政的には有利な財源となっている。

この活用にあたっては、過疎地域自立促進計画に事業を位置付ける必要があるが、金額的な上限はない。

ただし、過疎債は毎年全国で使える枠が決まっているので、どこまで使えるかは、国や県との協議が必要となる。

【事務局】

補足をさせていただくと、これまでの会議で改修費用が概ね2～3億円程度という数字をお示ししてきた。これが1つの目安となるのではないかと考えている。それに対して、過疎債がどれだけ充てられるかについては、今後の協議次第である。

【参加者】

保田小学校の道の駅整備にはどのくらいのお金がかかっているのか。

【参加者】

検討段階も含めて概ね13億円である。ハード部分で8～9億円と記憶している。

【市長】

2～3億円という説明もあったが、必要最低限の金額であって、その金額ではできないと考えている。

【発言者6】

廃校活用については、官だけでやる時代ではなく、当初から民間事業者、特にハードが絡む場合は、建築の専門的な知識を持った方に関わってもらった方が良かったのではないかと。今年度中にサウンディングなどをして、改修にあたっての注意点の洗い出しなどの検討をいただきたい。

また、今回の会議では客観的な数値、データが少なかった印象である。施設の特徴や差別化を考える上で、そうしたデータがあれば良かったと思う。

さらには、鴨川市では、旧江見小学校、旧太海小学校、旧主基小学校が「みんなの廃校プロジェクト」に掲載されているが、市全体の中でどう活用するかということを検討していただきたい。

【市長】

各地区からも廃校の利用について要望が出されているが、各校とも耐震性能がないことが課題となっている。耐震補強をした上で利用するとなると大変なお金がかかるし、一方で補強をせずに使った場合、何かあった時に市としても責任が出てくる。

関連して、市民会館についても耐震性能についての懸念があることから、耐震診断を行うこととしている。

厳しい財政状況の中で、耐震をどうするかをもう一度考えなければならない。

【発言者7】

鴨川市のこれからのキーワードは、「ウェルネス」だと思う。「ウェルネス」はわかりやすくいうと「健康」であるが、重要なのは、「地域も健康」であるということ。

これまで鴨川の観光は、地域や団体、行政が人もお金も出して、イベントなどを行い、土日に多くの集客を目指すものであった。しかし、イベント後の会議で必ず出てくるのは、「また来年もやるの」という声である。果たしてこれが健全と言えるのだろうか。

これからの観光は、誰かが犠牲になるのではなく、地域の人も交流しながら、事業を通じて幸せになれるということを追求していく時代だと思う。

したがって、ウェルネスを意識して、ここに来れば心も体も健康になるということが1つ。もう1つが、小湊地区が幸せな場所であるということ。この2つを両輪として追求していけば、皆さんの願う未来があると思う。

もう1点。イニシャルコストにいくらかけても良いとは思いますが、施設は造って終わりではない。その先に、行政と民間が一体となって、どうやって地域の人が責任を持ってやっていくかが重要である。その1つが、地域の若手を最終設計に関わらせて欲しいという提案である。多額の税を投入して造る施設の設計に最後まで携われば、施設をどう生かしていくかをしっかりと考えると思う。

今回の報告書で一番大きな変化は、これまであった小学校・中学校というゾーニングがなくなったことである。行政は垣根をなくしたので、民間も垣根をなくして、一緒にやっていかななくてはならないと思う。

【コーディネーター 石渡氏】

報告書の作成主体が「小湊まちづくり会議」となっているが、100人会議と検討会議を併せて「小湊まちづくり会議」という理解で良いか。

【事務局】

そのとおり。

【コーディネーター 石渡氏】

皆さんには、100人会議で出た色々な議論が、本当にこの報告書に反映されているか、確認をしていただきたい。

例えば、報告書の11ページに「地域の産業を伝承する空間の整備」とあるが、資料2では「地域の産業・文化を伝承する空間の整備」となっている。我々の分科会では、産

業・生業としての漁業ではなく、地域の文化としての漁業について議論をしてきた。したがって、報告書で「文化」という言葉が抜けていることについては、「スポーツ・文化」の「文化」に含まれるとの理解で許容とするとしても、説明文については内容の検討をお願いしたい。

このように、皆さんが改めて報告書を読んで、変更して欲しい点があった場合、それを吸い上げてもらうことはできるか。

【事務局】

先ほどの駐車場についてのご意見なども含め、この案には修正すべき点があると考えている。その他にもご意見があったら、事務局にお寄せいただきたい。その上で、我々で変更箇所を検討させていただき、19日の検討会議に提示をしたい。

【コーディネーター 石渡氏】

この報告書は、皆さんがつくったもの、という位置付けである。「自分ごと化会議」というタイトルもあるが、具現化していくにあたっては、皆さんが大きな役割をお持ちになると思う。その段階でも「自分ごと」として考えていってもらいたい。

【発言者 8】

施設の運営は民間の事業者委ねることになると思うが、どのような事業者にするのか、オープン後に民間の事業者と市民の関係はどうなるのかを知りたい。

事業者には、施設の維持管理に加えて、マーケットの開拓という役割もあるので、そういった意欲のある事業者を選んでいただきたい。

また、事業者の評価にあたっては、市民との意見交換ができるような仕組みを考えてもらいたい。そうすれば、「自分ごと化」が納得できるものとなる。

【事務局】

今後については、ニーズ調査をした上で事業者を選定して、さらに行政との役割分担を考えて運営していく。当然、造って終わりではないので、地域の皆さんとの関わりの中で発展的な施設としていきたいと考えている。

また、民間事業者を募集するにあたっては、条件等が詰められた段階で、改めて皆さんにはお集まりいただき、ご意見を伺う機会を設けたいと考えている。

さらには、運営にも関わっていただくというのが我々の願いでもあるので、必要な場作りに努めていきたい。

【コーディネーター 伊藤氏】

具現化の段階で、これまでの議論の雰囲気が無くなってしまった、ということがないように。みんなで最後まで作り上げるのが「自分ごと化」である。

ただ、自分ごとにするというのは、皆さんに負担となる部分も出てくる。

例えば、これから陥りやすいパターンとしては、市が広報誌やホームページで進捗状況等を公表して、皆さんはそれを見ていないというケースが考えられる。

皆さんは、自分で知ることと同時に家族や周りの人たちに、情報を伝えていただければありがたい。

6 まとめ（構想日本 伊藤総括ディレクター）

3月から8か月間会議をしてきたので、皆さんの感想をいただきながら進めていきたい。

【発言者1】

町内会長という立場で参加をした。こういった会議は初めてだったが、良い機会だったと思っている。小湊が良くなるような施設にしてもらいたい。

【発言者2】

皆さんで議論ができて有意義だった。先ほど、若手や地元へ責任を持たせて欲しいという発言もあったが、そのとおりだと思う。行政任せにするのではなく、そこに暮らす人が自分でできることを、できる時に、できる範囲でやるというのが一番大切だと思う。

【発言者3】

小湊のことをわからないまま参加したが、毎回、自分の思いを伝えたいという思いはあった。それを伝えられる雰囲気をコーディネーターや分科会の皆さんが作ってくれて、鴨川市の温かさを感じた。参加できて良かったと思う。

【発言者4】

小湊に足を運ぶことはかなわなかったが、通過する際には周りをよく見るようになった。私の地元の旧江見小学校も廃校になってしまったので、今回の会議に刺激を受けて、小学校を含めどうするか、地元に対しても少しずつ動き出しているところである。先ほど、若い人が、という話もあったが、先輩たちに任せるだけではなく、また、言われてからやるのではなく、自分たちから何かしようということで、地元にもフィードバックしていきたいと考えている。

【発言者5】

小湊に行きたい、来て良かった、また行きたいと思ってもらえるようにすることが大切。市もTwitterやLINEなどのSNSを通じてPRをしていって欲しい。

【発言者6】

小湊で漁業をやっているのですが、2班での議論に加わることで良かった。とても大切な文化であり、これからも残していかなければいけないということを感じたし、自分の息子たちにも残していけたら、と思っている。

小湊には嫁いできたが、改めて自分の住んでいる地域を見直せたし、子育てをしながら、また、楽しみながら、こうなったら良い、と関わっている自分も嬉しく思った。

これからが楽しみになった。

【発言者7】

学生として参加をした。鴨川出身で、今まで鴨川市に住んでいても、鴨川市のこと、行政のことを知らなかったなので、もっともっと市のことを知っていけたらと思っている。

【コーディネーター 石井氏】

こういった地域なので、自分の仕事だけではなく、地域での役割もあると思う。

人口が減っていく中で大変だとは思いますが、2つ目、3つ目の役割をどう楽しみながらやっていくかが地域の活性化には大切だと思う。

返子市では、春と秋に神社でワインを飲むお祭りがある。そこで、普段は東京に勤めている30代の男性の方が、その時だけ出店するローストチキン屋さんを始めた。

これは1つの例だが、今後できる施設で自分ができるところを、ここにいる皆さんが持ち寄れば、100種類の楽しみやサービスができあがると思う。

何か自分ができないかということは今からワクワクしながら考えてもらいたいし、今後、プランを作っていく中でも、そういったことができる余白を残してもらえると良いと思う。

【コーディネーター 石渡氏】

富津市で市民協議会を行った際のことである。

富津市も財政が厳しいということで、今後どうしていくかが議題となっていた。地域代表の方々からは、市税収入が必要ということで、産業振興や企業誘致が大切だ、といったような意見が出されていたが、自分の班にいた中学生にマイクを向けたところ、「なぜ田舎ではいけないのか」と発言をされた。そこから会議が一変した。

何が言いたいかということ、知見を持った方も絶対に必要だが、若い人や主婦など様々な人の意見を聞いて、意見を吸い上げる努力が行政には求められるということである。

皆さんも、機会があればぜひまたこういった会議に参加をしていただきたい。

【コーディネーター 伊藤氏】

高まった意識や関心をどう反映させれば良いかわからないという相談をよくいただく。

中には審議会の公募委員に手を挙げた人もいるし、議員に立候補しようとしている人もいる。

今後、受け皿を用意する中では、行政にしかできないこともあると思う。

例えば、普段自治会で活動していない人が、何かをしたいと思った時に、自治会との間に市が入って、意見を言える雰囲気を作るなど、そういうこともできるのではないかと。

【発言者8】

この会議に参加をして欲しいという話があった時に、また市が会議をやったという形だけ整えようとしているのか、という懐疑的な部分があった。

しかしながら、参加していくうちに自分の考えていることと違う意見が出てきて、面白い会議になってきたと感じたし、小湊の人だけが考えるのではなく、小湊以外の人の意見が入ったのも良かったと思う。

ところで、報告書で1点気になっているのが、「稼ぐ施設」という表現である。

稼ぐことはもちろん重要であるが、稼ぐことがノルマになってしまうと、働く人たちがノルマをこなすために集まってくるようになってしまう。

いつまでも税金を投入するという時代ではないので、ランニングコストがまかなえて、数十年後に建て替えるという計画は作る必要があるが、第一に稼ぐということを持っていくのは、ちょっと違うと思う。もう少し新しいやり方があるのではないかと。

明治時代、日本の人口は7,000万人だった。鴨川も小湊も今より人口は少なかったと思うが、“人間が暮らしている感”というのは今より強かったのではないか。それは、住んでいる人たちが自分たちの住んでいる地域を、山から海まで守ることができていたからだと思う。

人口が減って日本が厳しくなるというのは、今までのような大量生産・大量消費という仕組みを維持しようとしているからであって、そうではない考え方をすれば、“人間が暮らしている感”が強いまちづくりができるのではないか。

この試みが日本全体の地方創生に対して良い形になればと願っている。

【コーディネーター 伊藤氏】

「稼ぐ施設」という表現は確かに強いと思う。表現はもう一度考えさせて欲しい。

【発言者9】

普段接している人たちで話すと、どうしても考えが偏ってしまう部分がある。他の班の意見を伺っていると、自分が普段考えもしないような意見であったり、地元の事情であったりと様々なものが出ていた。

全てを網羅することは難しいと思うが、色々な意見が出て良い会議だったと思う。

【発言者10】

普段は仕事をしておらず、こういった会議に関わることもなかったので、毎回緊張しながら参加していた。

自分の子どももまだ小さいが、子どもが住みやすいものができて、一度は外に出たとしても、将来的に戻ってきて楽しく過ごせる小湊になったら良いと思う。

自分としても、子どもがそう思ってくれるように、こういった色々な機会がある時には参加して、子どもにその姿を見せていけたらと思った。

【コーディネーター 伊藤氏】

なぜ皆さんに感想を伺ったかという点、率直な思いを聞きたかったこともあるが、市役所の皆さんに聞いて欲しかったからである。

普段話を聞く方は、窓口に来る人や団体のトップになると思うが、市民の素朴な生の声が聞けたのではないかと思う。

先ほど、民間と行政との垣根という話があったが、どこの地でもあると思う。今のことを含めて、垣根がなくなると良いと感じている。

最後にコーディネーターの感想をもって、まとめとしたい。

【コーディネーター 山根氏】

少子高齢化については、小湊に限らず鴨川全体、日本全体の話であり、皆さん一人ひとりが当事者として、日本や鴨川、小湊がどうなっていくのかを考えていると思う。

ただ、それがどう行政に反映されているのか、国の政策となると遠いことなのでわからないこともあったと思うが、今回のように身近な学校がなくなる、その跡地をどうするかということを中心に、それを考えたことが大きかったのではないか。

その中身は、社会保障全般であったり、子育てなら、幼稚園や保育園をどうするかであったり、教育といったことでもあった。

色々な人の話を聞いて、自分とは違う意見もあったと思う。社会やコミュニティはそういった人々で作られている。これまで、そのような意見の相違がありながら、議論もせずに進んできたことが、逆におかしいと思ってしまうこともあるかもしれない。

こういった体験をすると、地域を作ることがどういうことなのかを考える、これが地方自治の原点であると思う。

もっと言えば、先ほど話のあった明治時代には、垣根としては民間も行政もなかったはずである。人口が増えたことや高度経済成長があったことによって、これだけ高度な社会システムや行政システムが構築されていった。ここからもう一度、日本がどうなっていくのかを見ていく1つのいい事例なのではないかと思う。

私からお願いしたいのは、ぜひ自分ごととして、鴨川市全体の財政のことを考えてもらいたいということである。

打ち出の小槌があるわけではない。市の財政となると誰かが用意してくれると思うかもしれないが、過疎債も3割は市の借金であり、残りの7割も国民の税金である。

今回のことをきっかけに考えていただいて、さらに良い鴨川市、小湊を作っていく起点になって欲しい。

【コーディネーター 石井氏】

全体的なことについては、先ほど申し上げたとおりである。

最後に感想を述べられた方の、子どもに参加する姿を見せたいという言葉が非常に素晴らしかった。今日その声が聞けて、この数か月鴨川に通って良かったなと思う。

【コーディネーター日本 石渡氏】

冒頭市長から、初めはワクワク感があったが、次第にそれが薄れていったという意見をいただいたという話があった。

事務局の考え方や検討会議の情報を十分に皆さんに伝えられなかったことが、そういった感想につながったのかと思う。その意味で、コーディネーターの力不足だったと思っている。その点はお詫びしたい。

これから具現化していく中で、皆さんの力が必要になると思う。その際には、またワクワク感を持って、皆さんの手でぜひ進めていってもらいたい。

【コーディネーター 伊藤氏】

市から100人会議の話をもらったのが去年の12月なので、約1年前ということになるが、ずっと考えていたのは、いかに「形式」をなくせるかであった。

行政の会議では、質問と答弁の繰り返しという形式張ったものになりがちで、その答弁についても、決裁前であったり、議会に諮る前であったりということで、明確な答えになっていないということが多々ある。

この100人会議では、なるべくそういったものをなくして、ざっくばらんに進めようということを中心に考えてきた。これは、市長がそのようなスタンスだからこそできたと感じている。

この後、意識が高まっている皆さんの次の一步はそれぞれ違って良いと思う。自治会に入っている方であれば、先ほど話のあった旧江見小学校の話のように、何かやってみようとして動いてみても良いと思うし、これまで市と全く関わりのなかった方は、例えば広報誌をよく読んで、考えたことを市にメールしてみるのも良いと思う。

抽選で当たったご縁ということで、今日で終わって良かったということではなく、どんなものができあがるかということまで、ぜひ一緒に関わっていただきたい。

きっと市も皆さんと一緒に進めていく仕組みを作ってくれるはずである。

7 閉会（市長）

なぜこういった会議をしたかという、理由は2つある。

1つは、今までのように行政内部で考えて、あるいは皆さんからご意見を聞いて、活用方をまとめていく方法について、職員から全ての責任を負ってやるのは無理だ、という話があったこと。

もう1つは、自分の過去の経験である。仕事をしていた時代、やはり行政との間には垣根があると感じていた。市議会議員を通じて行政に話をしてもらったこともあったが、なかなかうまく伝わらない。それならば、自分がやるしかないと思い、市議になり県議になり、そして、今こういった立場にいる。

ただし、市長は4年ごとに選挙があるので、変わる可能性がある。したがって、行政をやっていくのは職員でなくてはならないということを、いつも役所内で言っている。

職員がこの鴨川をどうするかをしっかりと考え、また市長をうまく使って、市議会との両輪で行政を進めていく必要があると考えている。

その時に、こういった会議をやって、市民の方々から直接お話を伺い、また市議会議員の方にも来ていただくことで、市民、市議会議員、市長、行政職員の間で共通認識が持てることになる。これが、行政を強くすることだと改めて感じている。

先ほど、SNSの話があった。利用している方は、こんなことをやっている、とか、小湊はこれから良くなっていく、というようなことを情報発信していただくとありがたい。

市では、構想日本の協力の下、事業仕分けを行った。これも市民の方にご意見をいただきたいということでやっているものであり、さらに今年は、行政が自ら考え、市で行っている600以上の全ての事業について、洗い直しをしているところでもある。皆さんには、行政が何をやっているかを普段からチェックをして、厳しい言葉をいただきたい。

富津市の話があった。富津市では、2013年に財政調整基金という市の貯金が2億6千万円になってしまったが、2018年には19億円くらいまで盛り返してきている。

鴨川も財政が厳しいということは、改めて皆さんにお示しをさせていただくが、皆さんと共通認識を持ちながら、一緒になって、このまちを作っていきたいと考えているので、様々な面でご意見をいただきたい。

この事業は、どのような事業者が入るのか、どんな施設になるのかなど、まだまだ先がある。皆さんと一緒に実現をしていきたいと考えている。ひとまず、100人会議は今回で終わりとなるが、今後ともよろしくお願ひしたい。

8か月間どうもありがとうございました。